

第 39 回クラシックを楽しむ会

2016 年 12 月 18 日（日）18:00～（1 時間 48 分、休憩除く）

タイトル：歌劇バレエ「くるみ割り人形」(チャイコフスキー)

会場等：ロイヤル・オペラ・ハウス 2000 年 12 月 27 日
(ロンドン、コベント・ガーデン)

楽団等：ロイヤル・オペラ・ハウス管弦楽団
ロイヤル・バレエ団、ロイヤル・バレエ学校生徒、
ロンドン礼拝堂ジュニア合唱団

指揮：エフゲニー・スヴェトラノフ

振付・演出：ピーター・ライト（原振付レフ・イワーノフ）

出演：アンソニー・ダウエル（ドロッセルマイヤー）
アリーナ・コジョカル（クララ）
イヴァン・プトロフ（ハンス・ペーター/くるみ割り人形）
吉田 都（金平糖の精）
ジョナサン・コープ（王子）
ゼナイダ・ヤノウスキー（薔薇の精）
その他（薔薇の精のエスコート役に佐々木陽平も）



くるみ割り人形をもらって喜ぶクララ

ものがたり

クリスマス・イブの夜、シュタールバウム家のパーティーに魔術師ドロッセルマイヤーが招待され、シュタールバウムの娘のクララにくるみ割り人形をプレゼントする。

その夜クララがくるみ割り人形の様子を見に行くと、広間はくるみ割り人形の兵隊たちとねずみたちの戦場。クララの活躍でねずみたちを撃退する。くるみ割り人形はドロッセルマイヤーの甥ハンス・ペーターに姿を変える。ドロッセルマイヤーは二人をおとぎの雪の国を通ってお菓子の王国に送り出す。二人は女王のこんぺい糖の精たちの歓迎を受ける。

現実世界のドロッセルマイヤーは魔法が解けたハンス・ペーターが帰ってきたのをみて喜ぶ。

みどころ聴きどころ

第 1 幕 真夜中の居間。クララの体がだんだん小さくなって人形やねずみのサイズになる演出は面白い。

第 2 幕のお菓子の国の祝宴の場。スペイン、アラビア、中国、ロシア各国の踊りと葦笛の踊り、そして華麗な花のワルツの後はこんぺい糖の精と王子のグラン・パドゥ・ドゥ。最大のみどころはプリンシパル吉田都が踊るこんぺい糖の踊り。これらの曲は組曲「くるみ割り人形」でお馴染み。

補足. 表記の主要出演者 6 名は全員（元上席、現、後の）プリンシパルである。

第 40 回クラシックを楽しむ会(予告)

タイトル：歌劇「ボエーム」(プッチーニ)

1 月 15 日(日) 17 時 30 分開場、18 時上映開始

寒い冬の夜、プッチーニの心温まる名作オペラをメトロポリタン歌劇場 2008 年公演で。アンジェラ・ゲオルギウとラモン・ヴァルガスの最高の歌声をおたのしみに・・・

2 月はお休み。3 月以降、「マノン・レスコー」、「セヴィリヤの理髪師」、「ドン・ジョバンニ」、「トゥーランドット」などを予定。

あらすじ（ロイヤル・バレエのピーター・ライト版）

【主要人物】

ドロッセルマイヤー： 機械仕掛け人形や時計を作る職人で時空を超越する魔術師。クララの名付け親
ハンス・ペーター： ドロッセルマイヤーの甥。魔法で醜いくるみ割り人形にされている。
クララ： シュタールバウム家の少女

まえおき

ドロッセルマイヤーがかつてある王様に仕えたときネズミ捕り機を発明して宮殿のねずみの半分を退治。ねずみの女王はその仕返しに彼の甥ハンス・ペーターに呪いをかけて醜いくるみ割り人形に変えた。その呪いを解くには、ねずみの魔女の息子であるねずみの王様を倒し、醜いくるみ割り人形を愛してくれる少女を見つけること。

【第1幕】

ある年のクリスマスイブ。シュタールバウム家のパーティーに招かれたドロッセルマイヤーは、甥にかけられた呪いを解く絶好の機会だと思った。なぜならシュタールバウム氏の娘クララは想像力豊かな心優しい少女、このクララなら醜いくるみ割り人形を愛してくれるかもしれないと。ドロッセルマイヤーはくるみ割り人形をクララに委ねることにした。

パーティーが終わり家が静かになると、クララはくるみ割り人形の様子を見に階下の広間へ下りて行った。クララはくるみ割り人形を気に入ったが、兄弟のフリッツが壊してしまった。

クララがくるみ割り人形を抱き上げていると、ドロッセルマイヤーが現れてクララを時間が浮遊する世界に誘い込み、魔術で広間を戦場に変えてねずみの王様を呼び出した。そしてねずみの王様率いるねずみ軍とくるみ割り人形率いるおもちゃの兵隊との戦いが始まった。くるみ割り人形はクララの助けを借りてねずみの王様を撃退した。

くるみ割り人形は呪いが解けて元のハンス・ペーターの姿に戻りクララとダンスを踊る。ドロッセルマイヤーは二人を雪の精が踊る雪の国を通ってお菓子の国へ旅立たせた。

【第2幕】

ハンス・ペーターとクララはクリスクス・エンジェルたちに導かれて、お菓子の国の女王こんぺい糖の精と王子に会うため旅に出た。ハンス・ペーターがクララの助けを得て呪いが解けたいきさつを話すと、こんぺい糖の精は彼らの勇気を讃えた。祝宴が開かれているいろんなお菓子の精がダンスを披露した。

気が付くとクララは自宅に帰っていて家の外に出ると、奇妙なことによく知っている若い男（ハンス・ペーター）に出会う。ハンス・ペーターはドロッセルマイヤーの仕事場に帰る。本当に呪いが解けたことが分かったドロッセルマイヤーは驚き、ハンス・ペーターと抱き合って喜ぶ。

小序曲	第12曲 ディヴェルティスマン（登場人物たちの踊り）
第1幕	チョコレート <small>の精</small> 【 スペインの踊り 】（ボレロ）
第1曲 情景【クリスマスツリー】	コーヒー <small>の精</small> 【 アラビアの踊り 】（コモド）
第2曲 行進曲	お茶 <small>の精</small> 【 中国の踊り 】
第3曲 子供たちの小ギャロップと両親の登場	トレパック【 ロシアの踊り 】
第4曲 踊りの情景【ドロッセルマイヤーの贈り物】	アーモンド <small>の羊飼</small> い【 葦笛の踊り 】
第5曲 情景と祖父の踊り	ジゴーニュ小母さんとキャンディ ボンボンたち
第6曲 情景【招待客の帰宅、そして夜】	第13曲 花のワルツ
第7曲 情景【くるみ割り人形とねずみの王様の戦い】	第14曲 パ・ド・ドゥ 【こんぺい糖 <small>の精</small> と王子 <small>のパ・ド・ドゥ</small> 】
第8曲 情景【松林の踊り】	【 アダージュ 】
第9曲 雪片のワルツ	ヴァリアシオン I（タランテラ）
第2幕	ヴァリアシオン II こんぺい糖<small>の精</small>の踊り
第10曲 情景【お菓子の国の魔法の城】	コーダ
第11曲 情景【クララと王子の登場】	第15曲 終幕 <small>のワルツ</small> とアポテオーズ

ロイヤル・バレエ団

イギリスの王立バレエ団。フランスのパリ・オペラ座、ロシアのマリンスキー・バレエの2大バレエ団に加えて、世界三大バレエ団の一つと称されることもある。傘下におくロイヤル・バレエ学校がこれまでに優れた舞踊手を輩出していることもあり、ロイヤル・バレエ団は国際的なバレエダンサーを目指す者にとって究極の目標と見なされているといっても過言ではない。100人近くいるダンサーの中で最高位のプリンシパルはわずか数名である。日本出身の舞踊手としては、現在、**平野亮一**、**高田茜**（以上プリンシパル）、小林ひかる、崔由姫（以上ファースト・ソリスト）、金子扶生、アクリ瑠嘉（以上ソリスト）らが所属している。また過去には**熊川哲也**、**吉田都**（いずれもプリンシパル）、佐々木陽平（ファースト・ソリスト）、蔵健太（ソリスト）らがいる。以上、ウィキペディアから



本拠地ロイヤルオペラハウス

吉田都

1983年ローザンヌ国際バレエコンクールに入賞後ロイヤル・バレエ学校に留学。バーミンガム・ロイヤル・バレエに入団し**ピーター・ライト**卿に認められてプリンシパルに昇格、95年に英国ロイヤル・バレエ団にプリンシパルとして移籍、合わせて22年間もの間プリンシパルとして活躍した。軽やかさや気品、繊細な音楽性を持ち味とし、古典バレエの正統派のヒロインを踊って比類がない。2010年4月、英国ロイヤル・バレエ団を退団。現在は日本に活動拠点を移している。



2009年引退発表

原作の童話、その翻訳小説、そして台本

E.T.A.ホフマンはバレエ「くるみ割り人形」以外にバレエ「 **Coppelia**」、オッフエンバックの歌劇「**ホフマン物語**」などの原作となった作品を発表した当時の人気作家であった。バレエ「くるみ割り人形」の原作は童話「くるみ割り人形とねずみの王様」である。これを**アレクサンドル・デュマ・ペール**がフランス語に翻訳小説にし、この小説をもとに**マリウス・プティパ**が台本を作成した。プティパがリハーサル直前に病に倒れ振付を後輩の**レフ・イワノフ**に託した。マリンスキー劇場支配人とプティパの板挟みで苦心惨憺して完成させたが初演は大成功と言えなかった。このため定番となる演出・振付がなく、21世紀に入った現在も新演出・新振付が作成されている。ロイヤル・バレエの**ピーター・ライト**版もその一つである。



E.T.A.ホフマン



デュマ・ペール

作曲の経緯と組曲「くるみ割り人形」

チャイコフスキーは「くるみ割り人形」作曲中に自作指揮の演奏会を企画していたが、作曲するひまがなかったため「くるみ割り人形」から8曲を選んで演奏会用組曲にした。バレエ初演に先立ち組曲版をチャイコフスキー自身が初演した。



チャイコフスキー

「こんぺい糖の精の踊り」について

こんぺい糖の精の踊り（原題は**ドラジェの精の踊り**、英語圏では**シュガープラムの精の踊り**）には当時フランスで発明されたばかりの**チェレスタ**が使われているが、チャイコフスキーはチェレスタがリムスキー・コルサコフたち他の作曲家に先に使われるのを防ぐため業者にくぎを刺していた。



チェレスタ

明治・大正時代の日本では「**ドラジェ**」は一般的でなかったため「**金平糖**」と翻訳したとされる。英語圏でもクリスマスのキャンデー「**シュガープラム**」に、イタリア語には「**コンフェット**」と翻訳されている。「ドラジェ」と「コンフェット」はいずれもアーモンドの糖衣掛け。「シュガープラム」は本来「梅」の意味はなく形と大きさが似ている砂糖で作った手間暇かかる高価な飴玉だったが「くるみ割り人形」作曲当時は産業革命で大量生産が可能になっていた。現在はプラムやナッツなどの入った「シュガープラム」も作られている。



ドラジェ



シュガープラム